

画像のなかの江戸城——版本江戸絵図を中心に——

千葉正樹

はじめに

この報告は江戸の都市民は江戸城をどのように認識していたのかという点に主な関心がある。⁽¹⁾これまで私の行ってきた江戸絵図研究は、小石川などの現象的都市域、すなわち開府期の計画都市域の外側に都市化現象の集積として成立した地域を対象にしてきた。⁽²⁾シンポジウムで杉本氏の提示された江戸の都市域区分のDに相当する地域である(杉本史子「江戸と江戸城」図1・本号所収)。今回は江戸絵図に描かれた城とその周辺の計画的都市域(杉本区分のA・B)の様相を把握し、これまでみてきた現象的都市域の描写との対比を試みた。

とくに江戸絵図のなかでも版本絵図を用いて、以前と同様にその描写の定量化と数値化を行っている。史料は東北大学狩野文庫所蔵の絵図をもちいた。

版本絵図は不特定多数の購買者に支えられる商品であり、現在の地図とよく似た、実態に即した客観性を要求されていたと考えられる。絵図である以上、その描写には「絵」的な主観が忍び込んでもいたが、しかしその「絵」の主観は買い手の共感の範囲内に収まっていたはずである。自分の知っている、あるいは知りたいと思っっている江戸が描かれていなければ、購買者はそっぽを向き、生産量は落ちて、私たちの時代に伝わらなかつたであろう。版本絵図は、アノニマスな消費者の志向と認識が、製作サイドに深甚な影響を及ぼすという、大衆文化の基本構造の中にあっ

た。したがって、江戸都市民が納得する最大公約数的な都市空間を、版本江戸絵図は表現しているものと想定できる。版本江戸絵図に表現された江戸城の姿とは、彼ら絵図利用者たちの社会的認識の写像である。

本題に入る前に、江戸の都市空間を表現する史料用語を確認しておきたい。江戸においては、開府当初から江戸城を中心とする同心円状の空間把握が行われてきた。⁽³⁾江戸絵図における描写はこの空間把握と深く結びついている。

最も外縁を成すラインが「朱引」である。ここには①札懸場境筋、②寺社方勧化場境筋、③江戸処払いの境界、④武士府外外出届の基準という四つの境界機能が集積していた。朱引確定後、その外側を「府外」、内側を「府内・市中」とみなすようになる。朱引の内側にある「墨引」の線が「御仕置筋ニ可当町奉行支配場境筋」であり、実質的な都市政策が及ぼされる範囲となった。この朱引と墨引は文政一(一八一八)年に武士府外外出届に関して目付の出した伺いに老中阿部正精が回答した結果であるが、それ以前の担当部署ごとに行われていた把握を整合したものととなっている。一七世紀後半以降、同様の境界認識が生まれ、大きく外へと移動しつつ、継承されていたとみなせる。

杉本区分のD地区は外堀の外側であり、墨引から朱引にいたる区域を含めて、「堀外・郭外」と呼ばれた。一方、外堀の内側はすべて「郭内」だが、うち外堀と内堀に挟まれた区域が「外郭・外曲輪」と記されている(杉本区分C)。内堀の内側が「内郭・内曲輪」(杉本区分B・A)で

ある。江戸城の堀は複雑な形状であるためか、外郭と内郭の区分には曖昧さがあったと思われる。内郭には概念として城内も含まれるが、一般にいう城内は「御城」として区分された。

1 小石川地域からみた江戸絵図の区分と特性

最初にこれまで見てきた小石川地域から、江戸絵図をグループ化し、その特徴を整理しておきたい。

小石川地域は郭外地域、すなわち杉本区分のDにあたり、そのなかでは内側の町奉行支配場（文政一年以降は墨引内）であった。開府当初の計画にはなかった都市化現象の集積によって生じた、現象的都市域である。全体は近世末まで小石川村として把握され、明治期になっても表通りのすぐ裏に農地が見られるような場所であった。

小石川のような墨引内の周縁部にある都市化した領域は、一般に「場末」として史料に記述される。場末は、概して多重・複系列の社会であり、吉田伸之の指摘する分節構造が末端で交差しているような複雑な様相を見せる。寺社・武家屋敷・町屋が入り交じる景観は場末では普通に見られた。特に町屋の場合は、郭内では一般的な町人身分のもの地権を主体とする「町」はむしろ少なく、百姓身分のものに地権のある百姓町屋と寺社支配の門前町が多くみられた。

小石川では寺社領百姓町屋という例も少なくない。たとえば大塚上町の場合、小石川村の村支配を受け、農地をもつ住民は年貢を負担していた。またここは東が伝通院領、西が護国寺領であった。当然、寺社方の支配がおよんでいて、年貢は両寺院に納めていたと考えられる。正徳三（一七一三）年には護国寺領、延享二（一七四五）年には伝通院領が町奉行支配に移されている。

このような状況から、都市変化の要因は多様となり、それにしたがっ

て絵図製作者の対応も複雑なものとならざるを得なかった。たとえば、細かくは未確認だが、場末帯においては版本絵図と『場末沿革図書』との間に武家屋敷名や位置の食い違いが見られる。これは宮崎勝美が指摘してきたように、相對替や町屋敷拝領などの手段で、本来の権利者と居住者が異なっていた実態を示していたと考えられる。

前論では江戸絵図における小石川地域の面積・距離表現の数値的变化、空間形状の正確性、文字情報に代表される情報量の変化を追いかけてみた。その後の調べを含め、現在、江戸全体を対象とする版本絵図（一般に「江戸大絵図」と呼称）は技術と表現の志向から次の六つの群に分けることが適当であろうと考えている。前論ではA～Fを時期区分として捉えていたが、その後、発生はA～Fの順だが、終了時期において重複する場合も少なくなかったことが分かっている。

A群

寛永～明暦期の絵図である。代表的なものとして最初の版本江戸絵図とされる『武州豊島郡江戸庄図』があるが、この絵図は加藤貴によって、出版はのちの時期ではなかったかと疑義が寄せられている⁽⁴⁾。とはいえ、この絵図を含め、当時出版されたと考えられる絵図はいくつかの傾向を共有している。まず、江戸城・寺社・海浜などを絵画的に描写して、空間表現は正確性を欠く。飯田龍一・俵元昭は測量を基準としていない可能性が高いが、表現として優雅であるとし、「寛永描画図」と称した⁽⁵⁾。後期は南北方向へ範囲を広げているが、ほとんどは郭内だけを描写している、小石川をはじめ、浅草・品川・隅田川以東などの周縁地域はあまり確認できない。正保一（一六四四）年の第二回国絵図・城絵図作成に呼応した幕用図と考えられる手描絵図、「正保江戸図」では、隅田川以東を除いて、ほぼ後の朱引に匹敵する範囲を描いており、その周辺部にも武家屋敷や寺社、町が認められる。つまり、A群の絵図はすでに成立

していた周縁部の都市域を意図的に捨象していた可能性が高い。

B群 遠近道印図

「図翁」と自ら名乗り、近世後期にまで顕著な影響を及ぼした絵図師、遠近道印の手になる絵図群である。道印製作の刊記は寛文一〇（一六七〇）年から正徳四（一七二四）年に及ぶが、その後半は死去後の増刷か、ほかの絵図師が製作し、名前を継承した可能性がある。道印が富山藩医藤井半知であることは、深井甚三が明らかにしている⁽⁶⁾。道印は明暦大火後の幕府実測図をもとに、大火後に拡張した周縁部を実測したといわれている。もともとなった幕用図は三井文庫の「万治年間江戸測量図」ではないかとされ、秋岡武次郎は、この絵図は明暦大火後、兵学者北条一門に命じて行われた江戸全体の測量図であるとしている⁽⁷⁾。版本絵図の世界では、小石川地域はこの絵図群ではじめて現れる。図1-1はのちに小石川養生所が開かれる地区の様相である。なお、図1では印象を比較してもらうため、それぞれの絵図から同じ地区を選択している。

道印は刊記に「分間」、すなわち「二分五間の積り」などの縮尺を用いている点と、「分度」、道路などの方位角を測定しているという点を強調している。たしかに面積と形状の描写は正確である。ただし、情報量は少なく、たとえば寛文一二年図の小石川養生所地区では、文字情報は一件しかない。絵画的な描写は排除され、全体に線と文字だけの白地図のような様相となっている。

C群 石川流宣図

道印と同時期に活動した絵師、石川流宣⁽⁸⁾の作図による。刊年は元禄二（一六八九）年から宝暦八（一七五八）年に及ぶが、道印同様、末期の絵図を本人が製作していたかどうかは定かではない。流宣は宝永三（一七〇六）年の『宝永江戸図鑑』に「問地の少違有りとも」問題ではないと述べ、宝永五（一七〇八）年には、道印の分間図に対抗して、「道が

分かる」という点から自らの絵図を「分道江戸大絵図」と名付けた。手彩色で寺社などの名所を絵画的に描写しているため、端的に言って見て楽しい絵図である。小石川地域では小石川御殿を極端に大きく描いた結果、地域内部の形状が大きくゆがむ。のちの養生所地区の文字情報は二件と道印図とあまり変わらない（図1-2）。

D群 道印系分間図

遠近道印を「江戸図の祖」と称し、道印図をもととする改版を行った絵図群である。さまざまな版元が参画しており、うち須原屋を版元とするものでは元禄一一（一六九八）年から天明四（一七八四）年までがこのグループとなる。最初の時期は道印本人の（あるいは道印名義の）絵図と重なっている。このグループは分間図を名乗り、道印の流れであるとするが、本家レベルの正確性は回復していない。大きさは限定されているとはいえず、寺社などの名所を絵画的に描写しており、これは流宣図の影響ではないかと見られる。小石川地域では情報量はやや増大し、享保一五（一七三〇）年『分間江戸大絵図』では養生所地区の文字情報は八件となった（図1-3）。

E群 金丸影直図

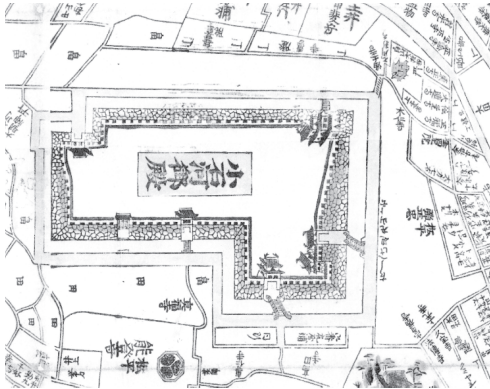
絵図師金丸彦五郎影直による須原屋の分間図である。明和八（一七七一年）年から安政六（一八五九）年まで、影直を絵図師とするのが見られるが、八八年という製作期間から考えて、後半は別の人間の手になるものである。影直も道印図の改版と称しており、系譜としては、D群分間図の一部と見せるが、実際はまったく新しい図である。時期によって面積や空間の平面形に若干のばらつきが見られるが、屋敷名の表現などには、斉一性を維持した。D群とまったくことなるのは、大幅に増大した情報量である（図1-4）。天明八年図の場合、養生所地区の文字情報は七九件と、以前の一〇倍以上に達した。さらに改版のたびに情報

図1
版本江戸絵図の
小石川養生所地区

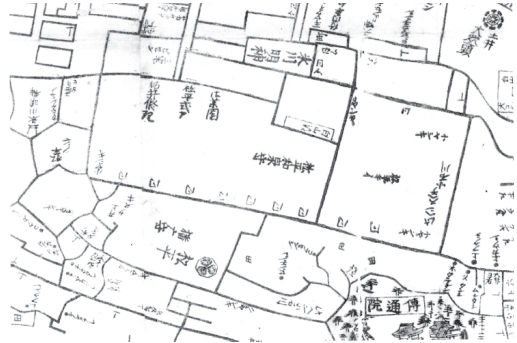
1-1 1690(元禄3)年『江戸大絵図』(B群)



1-2 1706(宝永3)年『宝永江戸図鑑』(C群)



1-3 1730(享保15)年『分間江戸大絵図』(D群)



1-4 1788(天明8)年『江戸分間大絵図』(E群)



1-5 1845(弘化2)年『天保改正御江戸大絵図』(F群)



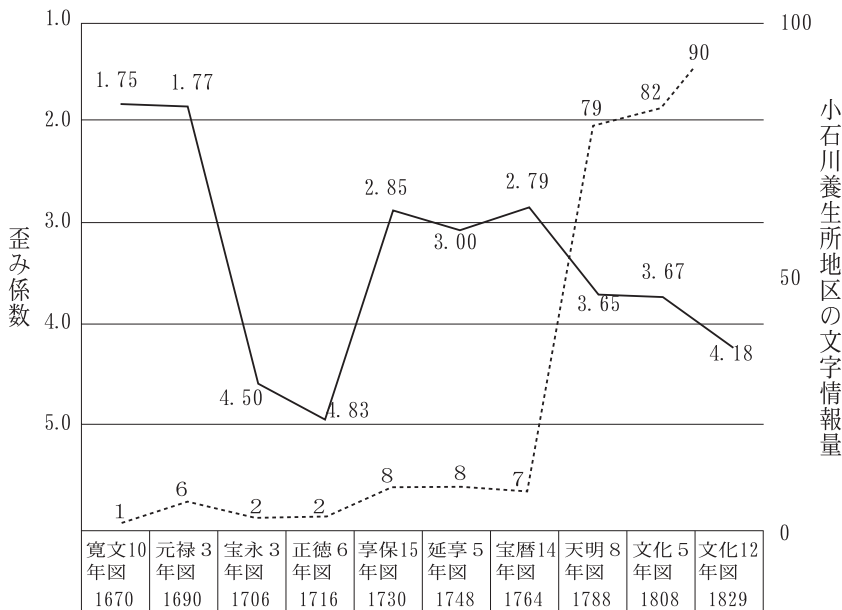
量が増大していく。一方、空間表現はそれと反比例するようにゆがみの度合いを増している。

F群 高井蘭山図

D、Eの須原屋を中心とする分間図が後期江戸大絵図の主流であったが、天保一四(一八四三)年から慶応三(一八六七)年にかけて、高井蘭山が出雲寺と岡田屋から出版した絵図群が存在する。天保期の「江戸絵図株帳」で出雲寺の江戸絵図出版参加が確認され、これは元禄期の廃版絵図の権利を引き継いだものであった。出雲寺の対須原屋戦略における商品として企図されたものかもしれない。飯田・俵は文化一四(一八一七)年の伊能忠敬「江戸府内図」を継承したものでないかと推測しており、たしかに影直の図と比べると、格段に精度が高い。一方、小石川地域をみていくと、地名や屋敷敷名には誤記が目立つ。弘化二(一八四五)年『天保改正御江戸大絵図』では、養生所地区の文字情報は三六件と、影直図の半分程度となっている(図1-5)。

以上のような小石川地域における版本江戸絵図の面積表現のばらつき具合と、養生所地区の文字情報数をまとめたものが図2のグラフである。⁽⁸⁾ 版本江戸絵図は最小幅〇・一五mm程度という線しか得られない木版技術の限界と、持ち運び可能という紙の大きさに規制されて、空間描写の正確性と情報量とが反比例する関係にあった。すなわち限られた紙面に、より多くの情報を入れようとすると、その場所を広くとる必要があり、情報の少ない別の場所で調整せざるを得ない。だから空間が歪む。Dの道印系分間図はより多くの情報を掲載する一方で空間描写の正確性を失うが、これはいわば消極的対応であった。その革新としてあらわれたEの金丸影直は情報量を最優先させ、空間を意図的に歪めたといえる。Fの蘭山図は空間描写は正確であったが、今度はそれに規制されて、文字情報などを入れる空間が不足したとみなせる。

図2 江戸絵図小石川養生所地区の文字情報量と空間描写の歪み



(実線) 小石川地区ですべての絵図に登場する地区の絵図上の面積最大値/最小値
 ※ 1.0に近いほど空間描写が正確
 (点線) 小石川養生所地区における文字情報量 (地名・寺社名まで)

情報量の増大を重視したと考えられるD群、E群のなかで、優先された情報は、①幹線道路(街道・往還)、②土地区画、③武家屋敷名、④寺社(名称・一部の外観)の順であった。町屋の情報は全体として軽視されがちであった。

2 江戸城の描写

それでは、版本江戸絵図において、江戸城の描写はどのような特徴を持っているのだろうか。図3に代表的な六点をまとめた。ここでは江戸図の一般的な表記にしたがって、西を上にしてある。

(A群) 明暦大火以前の江戸絵図において、江戸城はきわめて絵画的かつ具体的に描かれている(図3-1)。縄張も模式化されているがほぼ正確ではないかと思われ、少なくとも政治的に規制された痕跡はうかがえない。しかし空間は南北に引き延ばされた印象である。建築物の描写は天守閣に集中しており、櫓・門などは特定しがたい。「御本丸・西御丸」などの主要区画の名称のほか、当時の状況を反映して、城内の武家屋敷名が多数記されている。

(B群・道印図) 道印の図は内郭部をほとんど描写していない。外から見える建築物の描写も一切なく、中心部に大きい空白が現れている印象がある(図3-2)。元禄三年図において淡黄色で塗りつぶしている部分は本丸・二の丸・三の丸・西の丸・吹上に相当し、この部分の外側のライン上では門が描写されるが、その内側は何も描かれていない。ただしこの図では後の吹上に武家屋敷区画の描写がある。淡黄色に塗られた部分の外側の区画では、城門の枳形の平面形を描写している。半蔵門から南側の桜田堀は堀として表現されていない。

(C群・流宣図) 流宣は江戸城内部に精緻な絵画的描写を行っている(図3-3)。視点は東側にあり、上空から俯瞰している。

興味深いのは当時、存在していなかった天守を描いている点である。破風の位置は寛永度ものだが、小天守は描かれていない。五カ所の櫓など本丸・二の丸・西の丸の外観も立体的に描写しており、「御本丸」東北角の三重櫓は二の丸東櫓、東南角の二重櫓は桜田異櫓と推定されるが、中間にある二重櫓は特定できない。富士見櫓は描かれていない。建築物の屋根は瓦と杉皮葺を描き分けたとと思われる。城内の樹木、城壁の狭間も描写される。城内の文字表記は「御本丸・西之御丸・紅葉山・五之御丸」である。一方、縄張の平面形は不明瞭である。本丸など最も内側に位置する堀も描写するが、道灌堀など西側の堀には霞をかけ、位置がわからない。

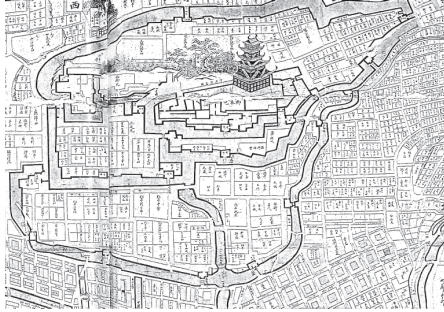
その外側の内郭部(吹上・北の丸および大名屋敷地区である杉本A・B地区)は平面状の描写となっていて、城門は建物の形状を表しつつ、枳形を表現している。特に半蔵門は正確である。描かれている最深い部の門のラインは、北桔橋・平川口・大手・内桜田・坂下渡り門・西丸大手・半蔵の各門であり、この線を境に城内(杉本A)とその他の内郭部(杉本A・B地区)を区分している意識がみられる。また、吹上・北の丸にあたる空間では、北の植溜・吹上西門前・半蔵門を結ぶ道と、植溜・北桔橋・西桔橋外・吹上西門の道を描写している。

このように流宣図では、内から順に、絵画的に描く江戸城最深处(本丸・西の丸・二の丸など)↓平面形を描く城内(吹上・北の丸)↓平面形を主とする大名屋敷地区という内郭部の描き分けが行われていた。ただし、杉本区分のAⅡ役宅地区とBⅡその他の大名屋敷地区のあいだには描き方の変化はみられない。

(D群・道印系分間図) 本丸・二の丸・西の丸地区は道印図と同じく何も描かなくなったが、道印とは違って大きく葵紋を描いているので、空白という印象は薄れている(図3-4)。わずかではあるが吹上・北

図3
江戸絵図における
江戸城地区の描写

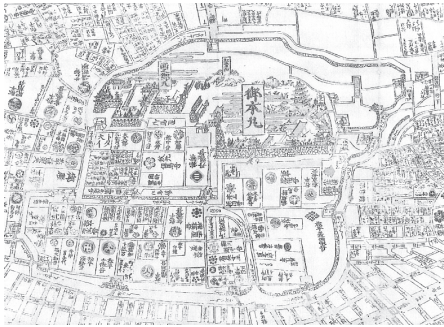
3-1 『武州豊嶋郡江戸庄図』(A群)



3-2 1670(寛文10)年『新板江戸大絵図』(B群)



3-3 1706(宝永3)年『宝永江戸図鑑』(C群)



3-4 1730(享保15)年『分間江戸大絵図』(D群)



3-5 1788(天明8)年『分間江戸大絵図』(E群)



3-6 1845(弘化2)年『天保改正御江戸大絵図』(F群)



の丸では竹、松、杉と思われる植物を描写し、瓦のタテ線・門扉・石垣・しゃちほこなど城門の外観も絵画的に描いていて、この点では流宣図の手法が流入しているといえる。天守台らしい四角い区画は外から見えたのかとも思われるが、実際の場所よりはかなり西側の地点である。さらに宝暦一四年図からは富士見櫓と推定される三重櫓が付け加えられている。富士見櫓は大火後、天守に代わる象徴性を持ったとされている。吹上・北の丸地区ではその西側を回り込む半蔵門から朝鮮馬場に至る道筋が描写されている。城内最深部にある文字表記は「西之御丸」ひとつで、葵紋とともに西上に表記し、大手位置にとらわれていない。

D群では各門の絵姿を描く一方、枳形はまったく表現していない。描かれた門の形成する最も内側のラインは、竹橋・半蔵・桜田・馬場先・和田倉・常盤橋・神田橋・一橋各門であり、最も内側の堀は田安門・清水門・雉子橋・一橋・神田橋・常盤橋・道三橋・和田倉門・馬場先門・外桜田門・半蔵門を結ぶ線である。内郭部の大名屋敷地区もこの堀のライン内に含まれていて、大名屋敷地区と接しているのにもかかわらず平川・大手・内桜田・坂下・西丸大手各門は表現されていない。つまり、描写内容と量の相違はあるものの、本丸・西の丸などの城内最深部↓吹上・北の丸↓内郭の大名屋敷地区という空間区分においては、流宣図と同様になっている。

(E群・影直図) 影直はそれまでの分間図とは異なって、江戸城において、一切の絵画的描写を廃している(図3-5)。本丸・二の丸・西の丸区画には、葵紋を上において、「御城・西御丸」という文字を東を頭に表記した。これは表門を上にし、紋所・屋敷名の順で表記するという武家屋敷一般の原則に準じたと考えられる。D群とは逆に城門の外観は描かないが、一方、絵図に描いたすべての城門で枳形の平面形を表現している。描かれた最も内側の門のラインは竹橋・和田倉・馬場先・外

桜田・半蔵各門を結ぶ線である。最も内側の堀は田安門・清水門・雉子橋・一橋・神田橋・常盤橋・道三橋・和田倉門・馬場先門・外桜田門・半蔵門を結ぶ線であり、すなわち最深部の門・堀の選択においてはそれまでの分間図とかわらない。北の丸は田安邸など諸施設を大名屋敷地区と同様に描いているが、吹上は「御城」区画の西に沿った道のように細く表現されるのみである。しかしそこには「代官町」という文字を記している。

(F群・蘭山図) 蘭山の図も影直同様、絵画的描写が一切みられない(図3-6)。最深部の門・堀の描写は影直図を含む分間図系と同様のラインを選択している。城門の外観を描かず、枳形を描写している点は影直図に似ている。同様に吹上は道路状となり、代官町という文字を添えている。城内の記号表記は葵紋・「御城・西御丸」で、表記はすべて東上だが、葵紋の位置は「御城」の下にあって、当時の江戸絵図で確立していた武家屋敷表記原則からは逸脱している。

全体として、城内のうち表現する範囲が変化している点に注意しておきたい。A群では、正確性に問題はあれ、すべての空間を描写してきた。B群の道印図は本丸・二の丸・西の丸を完全な空白域とし、吹上はのちに代官町と呼ばれる武家屋敷区画だけを描写している。C群の流宣図は、ほぼすべての空間を範囲としているが、絵画的描写に力点が置かれ、本丸・二の丸・西の丸の区分と縄張、門の平面形などは曖昧になる。D・E・F群の描写範囲はB群の道印図とほぼ同じ状態に戻っているが、武家屋敷のなくなった吹上は道の描写にとどまっている。

C群の流宣図以降、御城(杉本区分A地区)と呼ばれる区域においても吹上と北の丸は一段外と見なされ、最も内側である本丸・二の丸・西の丸とは別に認識されていると思われる。ただし両者を分かち史料用語は見いだしていない。その外側の内郭部は、吹上・北の丸地区と連続し

た平面形を主体とする描写が行われ、絵図全体における武家屋敷地帯の描き方と通底している。あえていうならば、流宣図以降、本丸・二の丸・西の丸等の江戸城最深部は、巨大だが単一の將軍屋敷区画として認識され、他の区域とは切り分けられるようになったといえよう。

3 江戸城の面積表現

ついで、小石川地域と同様の方法で、江戸城地域内部の面積表現をみていく。『江戸情報地図』（吉原健一郎・俵元昭・中川恵司、朝日新聞社、一九九四）にしたがって、その内堀で取り囲まれる範囲に二辺四〇〇mで正方形メッシュを設定した。この範囲は御城から内郭・内曲輪の大部分が含まれる。杉本区分のAとBに相当し、外縁部はわずかにCの町屋地域にかかっている。メッシュの区画数は三二である。なお、図4に表現したメッシュ形の図は、レイアウトのために北を上とした。

各正方形の角、すなわちメッシュの交点にあたる地点を、それぞれの絵図上で特定したが、本丸・二の丸・西の丸・吹上の描写は限定されるため、内部の情報では場所を見いだせない場合がある。その場合は外側の交点を結んで対応した。この場合、外側の地点位置が正しければ内側も正しい傾向となる。

まずA群だが、調査期間の喪失から、この方法による分析に耐えうる画像データを手でできなかったことをお詫びしたい。概略の観察としては、先ほど述べたように南北に引き延ばされた面積表現になっていることは間違いない。

(B群・道印図) メッシュをみていくと全体に整った空間描写であることがわかる(図4-1)。メッシュ図の左側、つまり北の丸から吹上にかけて、やや東西方向への圧縮が認められる程度である。このグループでメッシュの地区面積表現における最大値／最小値は一・八三から二・

二七の範囲にあった。

(C群・流宣図) 天守閣などの絵画的描写にとまない内部空間の特定地区が拡大している(図4-2)。特にメッシュ図中央左寄りの本丸の拡張が甚だしい。一方では縮小もあり、全般に本丸の左にある西の丸が東西(左右)に圧縮されている。そのさらに西(左)の吹上地区も東西の圧縮が目立っている。最大値／最小値は四・四二から四・四七であり、道印図の約二倍と、いわば安定して歪んでいる。

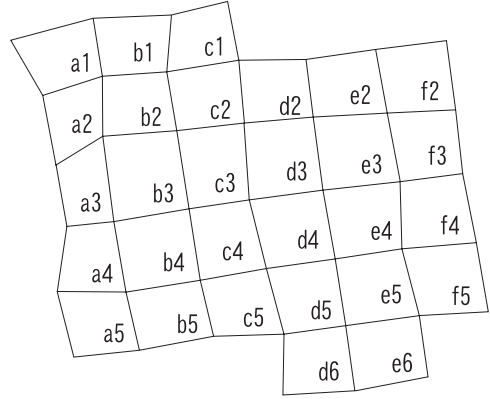
(D群・道印系分間図) 道印図をもとにしてはいるが、絵画的な描写が一部復活し、その影響が大きい(図4-3)。特に先ほど触れたように、天守台と思われる方形区画が本来の位置とはかなり西側にずれたところに表現されている。そのため、中央左上の本丸を中心とするメッシュがその西(左)のラインをさらに西に寄せた形状となり、面積が異様に大きくなっている。一方、その影響をうけて左手の西の丸と吹上地区が東西に大きく圧縮されている。最大値／最小値は三・六七以上あり、特に宝暦一四年図では二六にも及んだ。これは今回観察した絵図で最も歪みが大きい。一方、城の最深部から東の方角にあたる内郭部の描写は安定していて、道印図に近い、方形の区画が整然と並んでいる印象を取り戻している。

(E群・影直図) 絵画的描写がほとんどなくなったことにより、全体に整った印象となる(図4-4)。道印図と比較しても遜色はないが、本丸と西の丸が、流宣図同様に東西に圧縮されている。このグループ内における変化が少ないのも特徴で、最大値／最小値は二・三五から二・四七の範囲に収まっている。

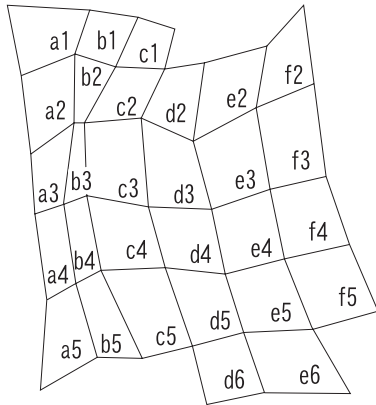
(F群・蘭山図) メッシュの形状は整っているが、これは城内の情報に乏しく、周辺部の正確性が反映した結果である(図4-5)。最大値／最小値は一・九五と小さいが、道印図のレベルは回復していない。

4-1 1690(元禄3)年『江戸大絵図』(B群)

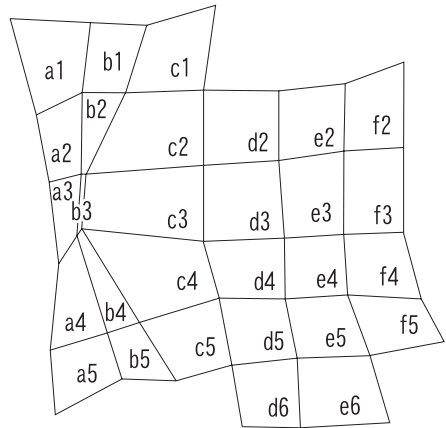
図4
版本江戸絵図江戸城地区の
平面形と面積表現



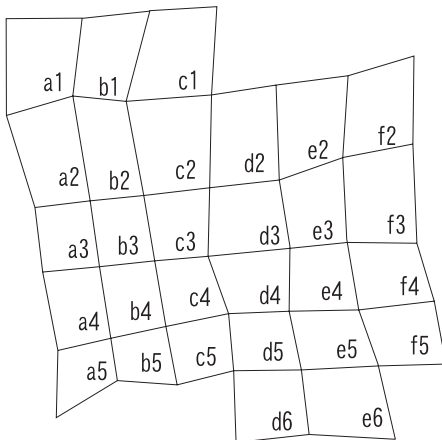
4-2 1706(宝永3)年『宝永江戸図鑑』(C群)



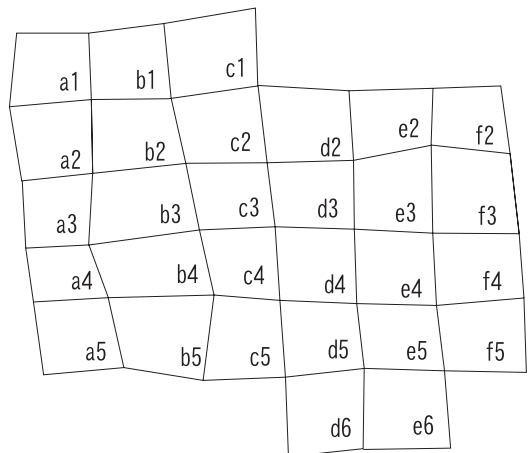
4-3 1730(享保15)年『分間江戸大絵図』(D群)



4-4 1788(天明8)年『江戸分間大絵図』(E群)



4-5 1845(弘化2)年『天保改正御江戸大絵図』(F群)



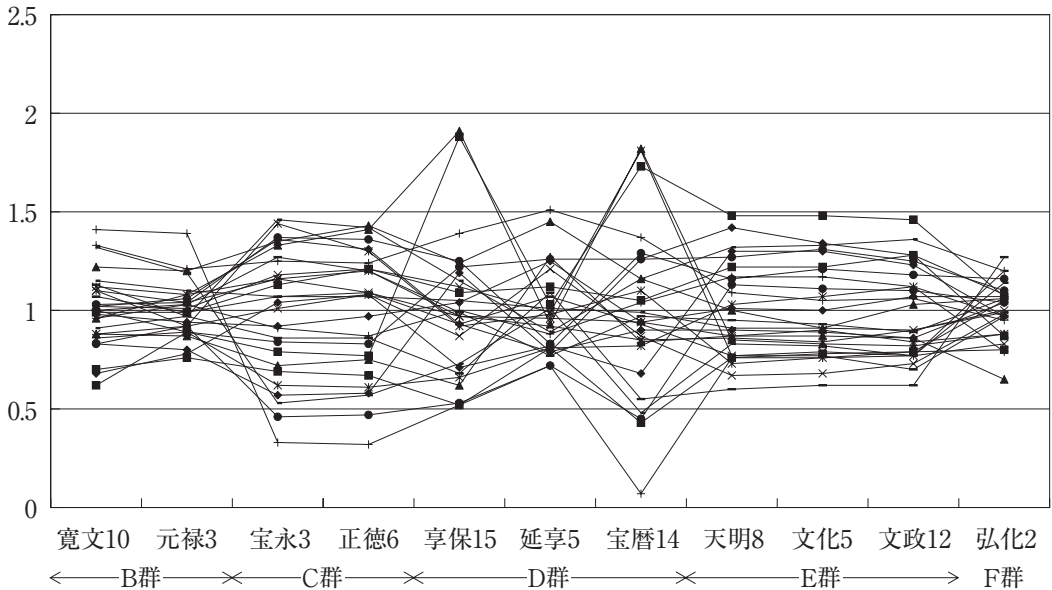
絵図それぞれでメッシュ全区画の正方形の面積を測定し、そのうえで絵図ごとの全区画の平均値をひととして、各区画の面積表現をみていったものが図5のグラフである。折れ線はそれぞれ同じ区画の変化を示している。線が上下にばらついていてる場合は江戸城地域の描写において歪みが大きく、中央に収斂している絵図は正確性が高いということになる。

図2でみた小石川地域の傾向と比較すると、B群の道印図からC群の流宣図に移行する段階で小石川同様に空間表現の歪みが大きくなっていく。しかし、小石川地域と違い、最も歪みが大きくなるのは、D群の道印系分間図である。E群の影直図は歪みが修整され、F群の蘭山図はさらに正確性を回復するという流れになる。B群以降の絵図は、流宣図で絵画表現が甚だしいほかは、江戸城内部の区画などはあまり表現されず、道路や堀もほとんど省略されている。城内部の文字情報は最多でも流宣図の五点に留まっている。つまり小石川地域にみられたように、情報量が多くなると空間表現が歪むという関係は成立していない。

最後に、江戸の他地域と比較するために、一八七八(明治一一)年『実測東京全図』上で、①江戸城、②日本橋周辺、③小石川の三地域に、一片八町の正方形地区を設定した。江戸城は本丸・西丸・吹上の大部分と二の丸の一部、すなわち「御城」の大部分が入っている。杉本区分のA地区とみてよいであろう。日本橋周辺は郭内における外郭・外曲輪であり、杉本区分のCである。この三地域について、日本橋地域における面積表現をひととして、他2地域の面積表現と比較してみたものが図6のグラフである。以下、A〜F群ごとに状況をみていく。

(A群) 寛永期(一六二四〜四四)の原図とされる『武州豊島郡江戸庄図』、明暦大火直前の『新添江戸之図』(一六五七)では、江戸城地区の日本橋地区にたいする比率が、一・五七、一・七六とかなり大きい。この段階では、小石川地区は図の外にあり、表現されていないため、グ

図5 江戸絵図江戸城地区の面積表現



ラフ上の数値は一・〇として取り扱っている。江戸城は全体に南北方向に引き延ばされ、西側を底辺とする台形状になっている。

(B群・道印図) 元禄三(一六九〇)年の『江戸大絵図』では江戸城一・一七、小石川〇・九六と正保江戸図を上回る正確性を示している。また三地域とも正方形に近い。

(C群・流宣図) 宝永三(一七〇六)年『宝永江戸図鑑』では、江戸城〇・六二に対して、小石川は一・九一と三倍以上の面積で描写している。これは流宣の「分道」の作図法、すなわち道の分岐を重視して、外へ外へと道の変化を追いかけていくような方法が影響したものかもしれない。特に小石川御殿は、江戸城に比較しても大幅に広く描写され、特殊な意識を感じさせる。三地域とも不定型な四辺形になっている。

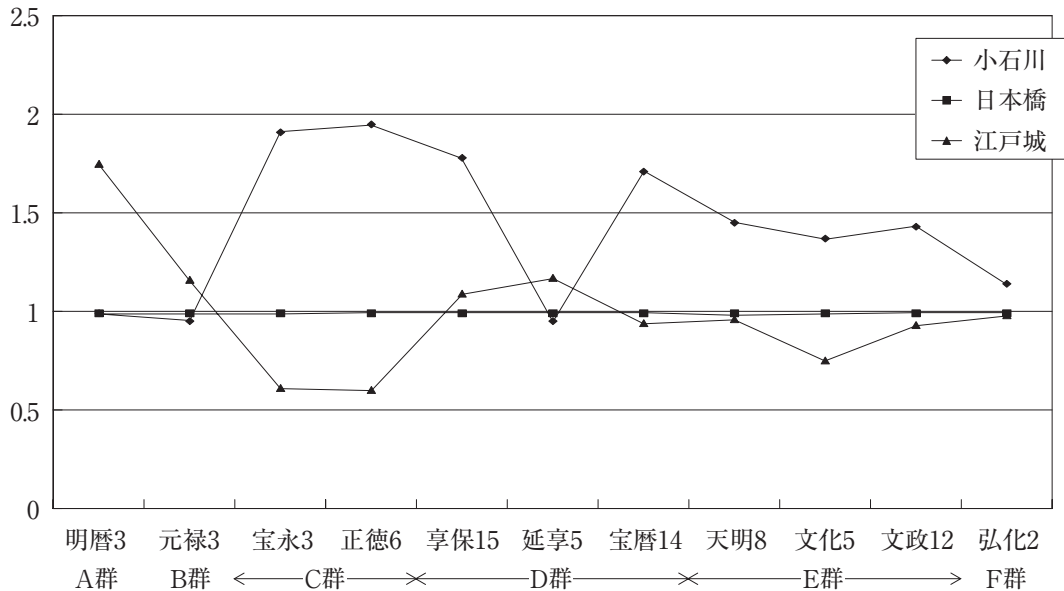
(D群・道印系分間図) 享保一五(一七三〇)年『分間江戸大絵図全』では、江戸城一・一〇に対して、小石川は一・七九と、流宣図ほどではないが乖離が大きい。江戸城に対して小石川は、ほぼ一・五倍以上の面積描写になっている。城・日本橋は正方形に近いが、小石川地域は東西に引き延ばされた形状である。

(E群・影直図) 天明八(一七八八)年の『江戸分間大絵図』では江戸城〇・九七、小石川一・四五と、江戸城は日本橋地域よりも小さい。形状はD群に似て、小石川のみ東西に長い。

(F群・蘭山図) 弘化二(一八四五)年『天保改正御江戸大絵図』では小石川一・一五、江戸城〇・九九と道印図に匹敵する正確性がみられる。形状も正方形に近い。

このように江戸城の面積表現は、日本橋地域を一として、最も小さく描かれた流宣図が〇・六二、最も大きいA群の『新添江戸之図』で一・七六と縮小・拡大の両方向に振れている。しかし、A群を外して考えると、〇・六二から一・一七の範囲であり、一方、郭外の小石川地域は一・

図6 江戸絵図における小石川・日本橋・江戸城地区の面積比較 (日本橋を1とする)



一五〇・一九一という数値になっている。

5 小括と課題

このように版本江戸絵図の江戸城は全体として面積の伸び縮みが著しいが、どちらかといえば一八世紀後半からは縮小傾向が定着した観がある。一方、小石川地域は実面積より大きく描かれる傾向がみられた。この間、小石川地域などの江戸絵図周縁部に盛り込まれた情報量は、複雑な経緯をたどった都市化の表現として大幅に増大したが、江戸城はごく限られた情報を大きく表現するに留まっている。つまり郭外の情報量に反比例するかたちで、江戸城地域全体の面積表現が縮小するという構図がみられた。言い方をかえると、江戸城には盛り込むべき情報が少ないから、その紙面上面積を削って、周辺部に付与し、都市周縁における情報量の増大に対応させたとみなすことができよう。

これまで見てきた限りでは、江戸城の内部を計測したのは幕用図に限られていたのではないかと考えている。遠近道印は三井文庫所蔵の幕府製作絵図を見ている可能性があるが、その後の版本江戸絵図において、本丸・二の丸・西の丸は平面形の情報としては大きい空白であった。そのため内部の絵画的描写がたやすく影響を与え、空間の伸び縮みが激しくなったといえる。

版本江戸絵図における江戸城の描写は、実際に足を踏み入れ、実見したという経験に基盤をおいていた可能性が指摘できる。D群の道印系分間図以降、城内西端に描かれる道筋(代官町通り)は山王祭行列巡行路と推定される。この道筋からは天守台・富士見櫓は実見できるのである。C群の流宣図において、半蔵門の平面形のみ描写されるのも、祭礼における通行経験が背景にあったのではないだろうか。江戸城内部の表現で、本丸・二の丸・西の丸などの最深部と、吹上・北の丸の区画を区別して

認識するようになった。これは、前者は足を踏み入れることもない、情報的に空白でかまわない空間であり、後者は祭礼時などに限定されてはいても実見する機会のある、したがって少しは情報を把握すべき空間として、分かれたれていたと考えている。

版本江戸絵図に現れている江戸城にたいする認識の変化は、関心の後退、一般化、実用性の卓越が基本的な流れであった。A群では内部情報を含む景観が描かれるが、B群の道印図は外回りの平面形を示すのみである。一方、道印と対抗したC群の流宣は城内を絵画的に表現するものの、それは存在しない天守を描いているように、多分に象徴的で観念的であった。D群の道印系分間図は空間表現に問題を生じさせつつも、実際に接する外観を描く努力が行われた。E群の影直図とF群の蘭山図は、いわば最大の武家屋敷として一般化してしまっただけ(9)といえよう。

今後の研究では、①名所記など版本絵画における認識との連動、②幕府側の意識変化および政策との関わりに注意を払う必要があると考えている。

寛文二(一六六二)年に京都で刊行された浅井了意『江戸名所記』では、代表的な名所として見開きの江戸城が描かれる。その中心は焼失し、再建されることの無かった天守閣がそびえる。ここには石川流宣の江戸絵図と類似した心性が感じられよう¹⁰⁾。そこから百六十年を経て、天保五(一八三四)年に刊行が始まる江戸古町名主、斎藤家三代の『江戸名所図会』においては、江戸城は駿河町図一点にのみ、町屋の背景として、はるか彼方に描写されるに過ぎない。つまり、版本の世界において、江戸城は一七世紀後半では現実を逸して強調され、一九世紀はじめには存在感が希薄なものとなっていた可能性がある。この点は木版印刷物を博搜し、全般の動向を確認する必要がある。

一方、この動きは幕府側の意識に誘導されていたと考えることもでき

る。史料は確認していないが、明暦大火後の天守閣再建問題について、もはや天守閣によって武威を示す必要はないという幕府中枢の見解があったとされる。元禄期以降、江戸城周辺の立ち入り規制など、同心円状の空間規制が強化されていき、享保六(一七二二)年「門番心得」では、三重の同心円による段階的警備が制度化されるにいたった。翌享保七年、出版物において將軍関係に一切触れてはならない、やむを得ない場合は許可を得よとする触れが出されている⁽¹⁾。

すなわち、石川流宣が製図し、『江戸名所記』が刊行された時期、幕府は城を見せたいという意識から脱却しつつある段階にあった。しかし、出版者にとって、また版本の購買者にとって、江戸城は江戸を代表する名所であり、「見るべき城」であるという意識のずれがあったといえよう。

金丸影直が製図し、『江戸名所図会』が準備された段階では、幕府にとって江戸城は都市民からさらに隔て、隠すべき存在となっていた。一方、ごくふつうの生活者にとっては通常、意識しない存在であり、名所でもないという状況に至っていたのではないだろうか。江戸城を見せなくするという点において幕府と都市民とは一見、同じ方向にみえるが、本質的には異なる意識であったといえよう。江戸城を、將軍の權威を高め、隔てられた存在／空間として位置づけていく幕府側政策と、文化的動向との絡み合いはさらに実態を解明して、考察を深める必要がある。

〔注〕

(1) この稿は二〇一〇年九月一日に行われたシンポジウムにおける報告をもととしている。シンポジウムではいくつか気づいていた課題を示したほか、パネリストや会場から、貴重なご質問やご意見を頂戴した。本来はそれらにお答えしなくてはならないのだが、三月一日以降の状況

の変化から、予定していた調査を断念し、また近年の絵図研究を博搜できていない。本稿はシンポジウム報告にわずかに手を入れて、文章化したものとなっている。心からお詫び申し上げたい。

(2) 拙論「江戸絵図の論理―江戸大絵図小石川地域の分析から―」吉田伸之ほか編『江戸の広場』(東京大学出版会、二〇〇五年)ほか。

(3) 江戸の都市境界を主とする制度・認識の変化については、拙著『江戸名所図会の世界―巨大都市の自画像―』(吉川弘文館、二〇〇一年)第四章で詳しい検討を行っている。

(4) 加藤貴「寛永江戸図の再検討」(『日本史攷究』第二四号、一九九八年)。

(5) 飯田龍一・俵元昭『江戸図の歴史』(築地書館、一九八八年)。

(6) 深井甚三『図翁遠近道印』(桂書房、一九九〇年)。

(7) 秋岡武次郎「寛文五枚図解説書」(『復刻版寛文五枚図』芳賀書店、一九七〇年)。なお三井文庫の絵図は実見していない。

(8) 拙稿二〇〇五による。一八七八(明治一一)年『東京実測全図』の小石川地域を一边四〇〇メートルの正方形区画に区分し、各絵図上でそれぞれの区画を表現している紙上面積を測定した。区画別数値の絵図ごとの最大値を最小値で除していき、その数値をグラフにゆがみの度合いとして表している。この数値が大きいほど正確な描写との乖離が甚だしいとみなせる。

(9) ただし、この変化は絵図の受容層(利用者)の交替を考慮する必要がある。絵画一般にみられるように、近世中期までは大名を含む武家が主要な購買層であった可能性がある。たとえば、飯田・俵前掲書では、元禄期の「槍印絵図」は大名間の路上儀礼に不可欠であったと指摘している。A群の絵図において縄張が描かれているのは、大名たちの必要に沿っていたとみることもできよう。

(10) 詳しくは拙著『江戸城が消えていく―江戸名所図会の到達点―』(吉川弘文館歴史文化ライブラリー、二〇〇七年)。

(11) とはいえ、これ以後も城門は描かれつつおろし、影直が城門の外観を描写しないのは意図的な選択であったと考えられる。